

東海大学建築会卒業設計賞 2014

審査評



審査員長 岸本和彦 / acaa

昨年に引き続き審査委員長を引き受け、公開審査の方法も日本建築家協会主催の神奈川大会及び全国大会に準じて行った。作品内容は、昨年に較べると癖のある力作が少なく、多くの作品で密度も表情も同じ様に感じた。結果として1次審査時の5票はほとんど迷うところがなく、あっさりと2次通過作品もまとまった。それ故に2次では会場に熱を持たせるため（会場がとにかく寒かった）多少時間をオーバーして討議を行い、賞を決定した。その様な中、希望の光を幾つかの作品に見つけることが出来たので幾つかの作品に絞って講評したいと思う。

最優秀賞の半田案は東海大らしい力強さと無謀さを唯一感じる作品であった。タワー建築は発見した手法をひたすら反復するだけの力業が散見されるが、この案は広場と路地、明と暗の秩序で構成され、その緻密な構成が外観に現れている点で今までにないタワー建築の魅力を感じた。優秀賞の三木案は本人のキャラクターを反映し、とても地味だが凄みのある案である。廃墟と化した工場の中をダイナミックに連結する空間体験と、新しい工場を空間的に交錯させる手法が、何しろ地味であるためにその魅力を見落としがちだが、その手腕は並みではない。地上広場を歩廊で巻き込んでいるところについては空間構成の手法として唯一異質であり、違和感があった。優秀賞の2案目は野川案である。これは2次の討議でどんどん評価が高まった作品であり（少なくとも私は）、これが公開審査の醍醐味でもある。模型表現は、その素材の扱いも含めて魅力的である。だが、その魅力は外観だけではなく、実はその屋根の下に広がる起伏と明暗のリズムに満ちた空間にある。バス通りも巻き込んだその空間にコミュニティーが溶け出し、雪の季節にそこで賑わいが生まれる風景を想像すると楽しくなる。

さて、それ以外で気になった作品は、幼稚園を計画した土方案。私は土方案を入賞候補として1次は票を入れた。屋根を接着した模型のために空間の魅力を目で見ることが出来なかったのが残念だが、起伏を利用したスケールのコントロール、パレットを分割し場をつくり出す手法と建築的様相には魅力を感じた。残念ながら最終的に賞に票を入れなかった理由は、建築としての存在の仕方が地域に対してどの程度すりあわせされているのか不明で、1階レベルの外周部も全てガラスで囲まれ、気持ちのよい屋上庭園（これも仕上げが真っ白なのは如何なものか）も完全に街から切り離されている点が問題であると感じたからである。

山中案はその物量で圧倒される。しかし、やはりその建築とデッキとのすりあわせ方に造形的スタディーが欠けていたと思う。私は是非とも分棟配置され積層された建築を用いず、仮想地盤の地形化、空間化の手法で勝負してほしい。

金子案はその模型表現からも分かる通り建築に向かう丁寧さが何よりも好感が持てる案である。大きなことは何もしていないが、思い描く路地的空間はきっと魅力的だろうし、そこに行ってみたいと思わせる案である。彼女の人柄がよく表れていると思う。全体をざっと見て思うことは、もっと切実な心に響く社会的テーマを本質的に扱ってほしいということと、物、カタチから逃げている学生が例年よりも確実に多かったことである。それは残念ながら平面図の稚拙さや、表現のごまかしで我々に伝わってきってしまう。

社会にでればいやでもそこに向き合わなければならない。何とか力強く自分の道を切り開いて行ってもらいたいと願う。

私は非常勤講師を10年務めさせて頂いた節目の年であり、今年の卒業生も2年の頃を懐かしく思い出しながら作品を拝見した。非常に思い出深い年になった。